

幕末期の儒学者 柏の偉人芳野金陵

墨書など40点
を独自に蒐集



庭仕事をしていた薮崎恒雄さんは気軽に話をしてくれた

柏市史に十一ページにわたって解説され、「柏のむかし」（市史編さん委員会）では「まさに暗夜の星、光芒の一線として、郷土が誇り得る偉人」とまで絶賛されている芳野金陵（一八〇二—一八七八）という人がいる。松ヶ崎出身の、幕末期の儒学者である。

その芳野金陵の墨書、書簡、遺稿など四十点を蒐集したのが名戸ヶ谷の薮崎恒雄さん。自宅の敷地に建てた「弥惣治文庫」で公開している。

大町桂月の資料展のときも紹介したが、「市教委が何もやつてくれない」と薮崎恒雄さんはいう。

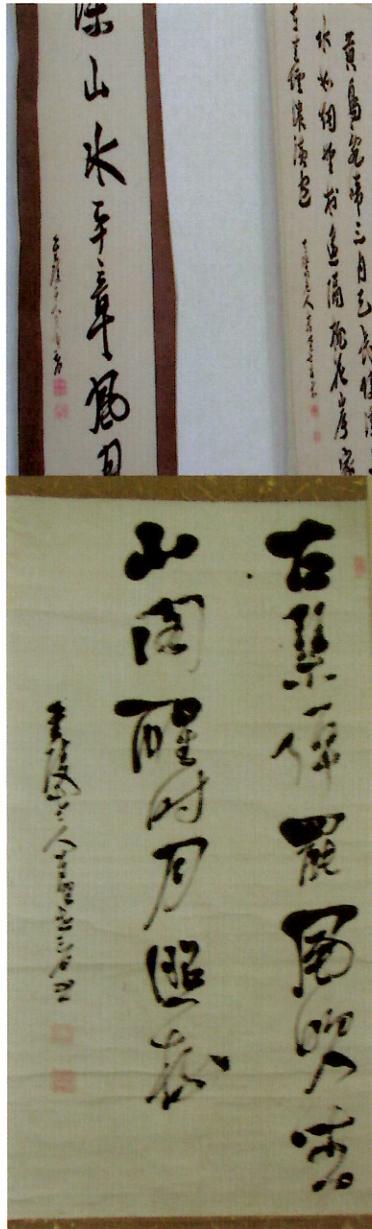


←この2行の掛軸を読む

名戸ヶ谷の野惣治文庫で公開

金陵は享和二年（一八〇二）、下総国相馬郡松ヶ崎で医業を営む芳野南山の第三子として生まれ、長じて江戸へ遊学、亀田鵬斎の子綾瀬の門を叩く。以後二十年間、家塾を開く。「旧弊を除き、新政を布く」など藩の活性化に励む。文久二年（一八六二）に幕府に抜擢され、昌平齋の儒官になる。「新政になり、再び昌平齋の教授になる。ペリー提督率いる艦隊が浦賀に来航し、吉田松蔭らが死罪になる安政の大獄というあわただしい時代、金陵も建議に加わったという。退官後、「帰耕の時、地を大塚に購いて懇田に従事し、傍生徒を教え」七十七で病没している。

卷石堂病院の先祖が、金陵の兄道斎（儒医）で、関係者で組織する金陵会が九月に、柏そごうで展覧会を開く。薮崎さんも協賛して墨書などを展示するという。さらに、桂月・金陵に統いて、金陵の師・亀田鵬斎の資料の蒐集が始まつており、秋には公開するそうである。



古葉彈じ罷めば風坐を吹き
山閣醒むるの時月林を照らす